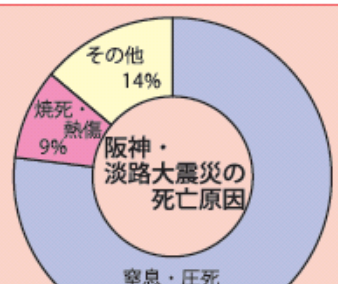


地域危険度マップ

「地域危険度マップ」は、地震の揺れによる建物被害発生の危険度分布を相対的に示したもので、表面の「揺れやすさマップ」の揺れによって建物が全壊すると予想される割合を「危険度」として表示したものです。メッシュ内の揺れが強い地域や、行政区内に古い住宅があると危険度が高くなります。

● 怖い家屋の倒壊

地震による死亡やケガの原因で最も多いのは、家屋の倒壊や家具の転倒による「窒息・圧死」であり、阪神・淡路大震災での死者の約8割を占めていました。



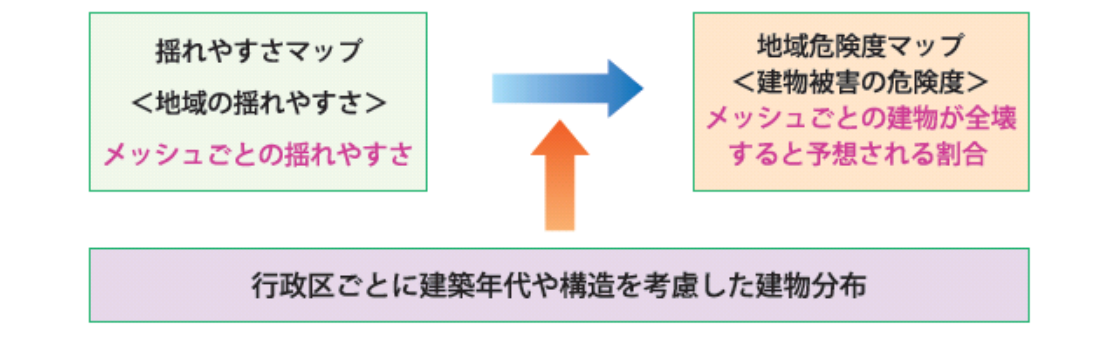
『阪神・淡路大震災調査報告 総集編』
阪神・淡路大震災調査報告編集委員会
(2000) 厚生省大臣官房統計情報部
『人口動態統計からみた阪神・淡路大震災による死亡の状況』(1995.12)より作成



皆さんの生命・財産を守るためには、**住宅・建築物の耐震化**が極めて重要です。

● 建物被害発生の危険度分布を把握

「地域危険度マップ」は、行政区ごとに分布する建物の建築年代や構造を集計し、その割合と50mメッシュ単位の揺れやすさをもとに全壊すると予想される建物の割合を表示したものです。危険度の数値が大きくなるほど地域で被害を受ける建物の割合が大きくなります。

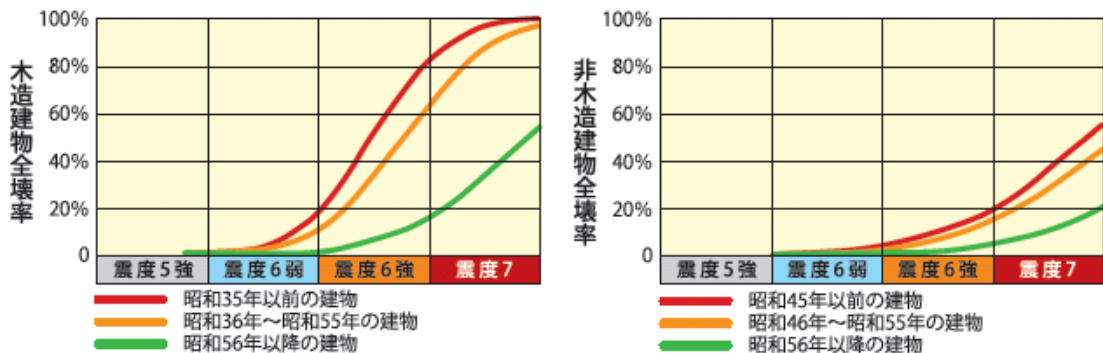


● 地震による住宅などの建物の損傷状況

全壊	大規模半壊	半壊	半壊に至らない
居住のための基本的機能を失った状態を指します。住宅の全体、もしくは外壁や柱の傾斜が1/20以上、または、経済的な損害の割合が50%以上	大規模な補修を行わなければ、住宅に居住することができない状態を指します。経済的な損害の割合が40%以上50%未満	居住のための基本的な機能の一部を失った状態を指します。経済的な損害の割合が20%以上40%未満	軽微な被害を受けた状態を指します。経済的な損害の割合が20%未満

● 過去の地震による震度と建物全壊率の関係

下図は震度と全壊率の関係を建築年代別・構造別に示しています。建築年代が古い建物ほど、全壊率は高くなっています。特に古い建物の全壊率は、新しい建物の全壊率に比べて、震度6強以上で急激に高くなっています。



● 地震に備えた建物の耐震化

木造建物耐震性のチェックポイント

- ご自宅の耐震性について確認してみましょう。
- ① 建てたのは昭和56年(1981年)5月以前である。
 - ② 過去に浸水、火災、車の突入事故などに見舞われたことがある。
 - ③ 壁や基礎にひび割れがある、傾いているのがわかるなど老朽化している。
 - ④ 建物の平面の形状や、偏って大きな窓があるなど耐震性に関わる問題がある。

ひとつでも当てはまれば、建築士などに相談してみましょう。本市では、耐震診断費の一部補助を実施しています。補助についての詳細は、市役所までお問い合わせください。



● 地域危険度凡例

危険度	危険度6	危険度5	危険度4	危険度3	危険度2	危険度1
地域内の建物の中で全壊する建物の割合	20%以上 30%未満	10%以上 20%未満	7%以上 10%未満	5%以上 7%未満	3%以上 5%未満	3%未満

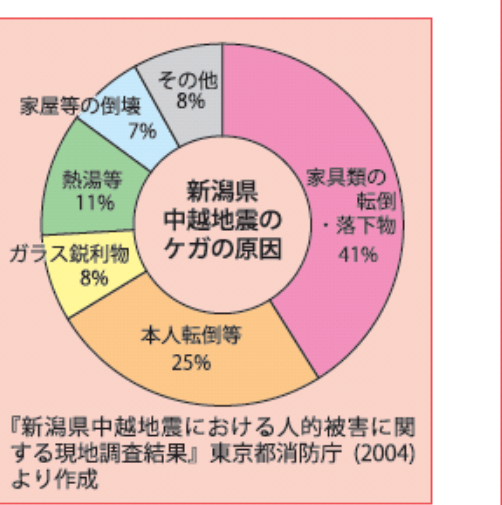
● 凡例

記号	名称
	避難所
	避難場所
	国道
	県道・主要地方道
	鉄道(JR)
	市町界
	地域界
	水面

● 家具や家電製品の地震対策も忘れず

住宅の倒壊を免れても、タンスなどの家具が転倒、テレビや電子レンジが飛び、ガラスが砕け散るなど、何気ないものが一瞬にして凶器に変わります。

新潟県中越地震によるケガの原因の4割以上が家具類の転倒・落下と言われています。また、ケガをすることで避難行動に大きな支障がでることがあります。



● 家具の配置や転倒防止のチェックポイント

- ご自宅の中を確認してみましょう。
- ① 寝室や食事を摂る場所、避難経路になる場所に、大きな家電製品や家具は置かない。
 - ② 収納は重いものを下へ、軽いものを上に入れる。
 - ③ 大型の家電製品や家具は、転倒防止器具で固定する。
 - ④ 食器や本などが飛び出さないように扉ストッパーをつける。
 - ⑤ ガラスには飛散防止フィルムを貼る。

